

平成21年4月24日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17390573
 研究課題名（和文） 癒しのプロセスを促進する看護技術に関する開発研究

研究課題名（英文） Research and Development of Nursing Art
 to Facilitate the Healing Process

研究代表者 川原由佳里
 川原 由佳里（KAWAHARA YUKARI）
 日本赤十字看護大学・看護学部・准教授
 研究者番号：70308287

研究成果の概要：

看護における「癒し」の概念／研究のレビューと、臨床における触れる技、代替療法の利用に関する看護師及びアロマセラピストへの面接調査を通じて、癒しの看護技術の現状を明らかにした。それをふまえて癒しの看護技術としてのハンドマッサージを開発し、健常者とがん患者に対する実験研究を通じて安全性と有効性を確認した。また臨床適用の可能性を確認するため看護職を対象としたセミナーを実施し、適切な評価を得た。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,800,000	0	1,800,000
2006年度	6,900,000	0	6,900,000
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
総計	11,800,000	930,000	12,730,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護技術、補完・代替医療、ハンドマッサージ、リラクゼーション、安楽

1. 研究開始当初の背景

国内外で実施されている補完・代替療法に関する研究は、疾患への治療効果を確かめるものと患者の安寧やQOLへの効果を確かめるものに大きく分けられる。本研究はその目的において後者に位置づく。この分野の研究にはこれまでマッサージががん患者の疲労感、QOL、安寧などに及ぼす効果を評価したものがあつたが、全人的な看護技術として開発し、適切な手順に従ってその安全性及び有効性を評価しているものは少なかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は癒しのプロセスを促進するホリスティックな看護技術を開発研究することにある。この目的のもと、本研究では以下の課題に取り組んだ。

- (1) 看護における癒しの概念と研究の現状と成果を明らかにすること
- (2) 看護の場における安楽の技、代替補完療法の利用の実態を明らかにすること
- (3) 癒しの看護技術としてのハンドマッサージを開発し、評価するシステムを構築すること

- (4) 癒しの看護技術としてのハンドマッサージが健常者に及ぼす効果と安全性を明らかにすること
- (5) 癒しの看護技術としてのハンドマッサージががん患者に及ぼす効果と安全性を明らかにすること
- (6) 癒しの看護技術としてのハンドマッサージの普及プログラムを評価すること

3. 研究の方法

(以下、各項目は上の研究課題に対応)

- (1) 看護における癒しの概念と研究に関する文献検討

癒しの概念に関しては、国内外の看護の理論的文献、安楽・リラクゼーションの概念に関する文献を対象とし、現代の癒しの概念の思想的基盤を明らかにすべく、ヒストリカルレビューを行った。癒しに関する研究の現状と成果を把握するため、医中誌ならびにCINAHLにより関連文献を抽出、GRADEシステムを参考にした質の評価のもとに、研究のデザイン、対象、方法、評価の指標、成果の現状を分析評価した。

- (2) 臨床における癒しの看護技術と補完代替療法の利用に関する実態調査

研究期間は2005年8月～2006年5月。対象者は一般病棟、緩和ケア、小児、助産、在宅の場で癒しの技を実践し、補完代替療法を利用する看護職13名と補完代替療法のセラピスト5名である。データは半構成的インタビューにより収集し、触れる技をめぐる看護師の経験、臨床における触れる技の位置づけ、看護における触れる技の特徴について、質的記述的に分析した。

- (3) 癒しの看護技術としてのハンドマッサージの開発と評価システムの構築

開発期間は2005年7月～2006年7月。メディカル・マッサージの専門家による講習会を計4回開催して、ハンドおよびフットマッサージの内容と方法を検討した。さらにハンドおよびフットマッサージの効果の評価するシステムの構築に向けて2度のプレテストを実施した。対象者はそれぞれ20名、28名であり、評価するための指標として、血圧、脈拍、唾液アミラーゼ、血流、皮膚温、POMS等の信頼性や妥当性を検討した。

- (4) 癒しの看護技術としてのハンドマッサージの健常者への効果に関する研究

研究期間は2007年7月～8月。対象者は研究に同意の得られた健康な女性18名である。実験群、比較群各9名とし、両群に暗算によるストレス負荷を実施したのち、実験群にはオイルを用いた片側7分のハンドマッサージを、比較群は7分間施術者が側に座るとい

介入を実施した。効果を測定するために、マッサージを実施しない対側の手の脈波、皮膚温、血流、さらに心電図、呼吸数を持続的に測定、適宜、唾液アミラーゼ値を測定、また実験の前後でPOMS、タッチ尺度への記入を依頼した。データはSPSS15.0J for Windowsを用い、交互作用を分析、その有無に応じた事後分析を実施した。

- (5) 癒しの看護技術としてのハンドマッサージのがん患者への効果に関する研究

研究期間は2008年7月～8月。対象者は研究に同意の得られた外来通院中のがん患者5名である。5分間の安静の後、オイルを用いた片側7分間のハンドマッサージの介入を実施した。効果を測定するために、マッサージを実施しない対側の手の脈波、皮膚温、血流、心電図を持続的に測定、また実験の前後でPOMS、タッチ尺度への記入を依頼し、実験後にインタビューを行った。データはSPSS15.0J for Windowsを用い分析した。

- (6) 癒しの看護技術に関する普及プログラムの評価

研究期間は2007年10月。癒しの看護技術の研究の現況、癒しの看護技術としてのハンドマッサージ、アロマ・ハンドマッサージの実施と評価の測定からなる普及プログラムを作成し、関連学会の交流学会で実施、参加者に研究の手指を説明したうえでアンケート記入への協力を依頼した。

4. 研究成果

(以下、各項目は上の研究課題に対応)

- (1) 看護における癒しの概念と研究に関する文献検討

看護における癒しの概念はかつてサイエンスを標榜していた時代の影響により表現は限定されているが、癒しと看護の間には焦点をあてる現象や視座に多くの共通点があること、現代では「癒し」や「安楽」の概念はよりホリスティックな観点から構造化かつ精緻化され、その概念のもとに折りやセラピューティックタッチなど様々な補完代替医療の実践を取りこみつつあることが明らかになった。研究に関してはそれぞれに状況、母集団、介入、コントロール群、評価の指標やタイミングが異なるため統括することが難しいが、看護におけるタッチやマッサージが、ストレスや苦痛のある状況、慢性的な状況において、リラクゼーション、ストレス緩和、症状軽減等の効果をもたらすことが明らかになるとともに、今後この分野における研究の課題が明らかにされた。

- (2) 臨床における癒しの看護技術と補完代替療法の利用に関する実態調査

看護師のインタビューから、臨床において触れるケアはそれぞれの状況において即応的に、直観的に行われ、看護師とそれを受ける人々の双方に深い感覚的・情緒的交流をもたらしていること、その背景には相手の状況に呼応する看護師の身体の働きがあること、しかし臨床では触れるケアはその他のケアに比べて優先順位が低く、スタッフ間で共有されることも少ない現状があることが明らかにされた。またアロマセラピストとの比較からは、看護における触れるケアの特徴はその目的の多義性、状況への即応性、身体を通じての交流の可能性を探究することにあると考えられた。看護における触れるケアの行方は看護師たちが自らの経験を通じてその意義や価値を認められるかにかかっていると考えられ、触れるケアを日常の看護実践の中で共有され、伝えられ、実践されるものにしていく必要性が示唆された。

(3) 癒しの看護技術としてのハンドマッサージの開発と評価システムの構築

癒しの看護技術は実践で応用することを鑑み、忙しい臨床でもすぐに適用できる片手7分のハンドマッサージのプロトコールを作成した。技術開発ではリラクゼーションの効果だけでなく、それを通じて気分が落ち着き、相互に交流が図られ、孤独感が和らぐなどホリスティックな効果をもたらすことをめざした。また病者が対象であることを想定し、強すぎない圧で行うこと、手に傷や異常があるときには行わないことなど適用に関する条件を検討した。

開発した技術を評価するためのシステムを構築するために、2度のプレテストを実施した。そこでは血圧、脈拍、唾液アミラーゼの値に有意差は見られなかったものの、POMSやアンケートからはハンドマッサージが緊張緩和やリラクセス、安心感などの効果をもつことが示唆された。評価システムのうち、生理学的な側面への効果についてはこれらの変化を敏感に反映する指標を用いて測定することが必要との示唆が得られた。

(4) 癒しの看護技術としてのハンドマッサージの健常者への効果に関する研究

健常者に対してハンドマッサージを実施した場合としなかった場合を比較したところ、リラクセスの指標である心拍数の低下に交互作用($p=.041$)が見られ、事後分析で多重比較(シェッフエ)を実施した結果、両群の介入後半($p=.008$)、介入後5分($p=.040$)、介入後10分($p=.018$)に有意差が確認された。また交感神経活動の低下を指尖部の皮膚血流では、交互作用が見られなかったが、被験者間効果の判定において有意差($p=.034$)が見ら

れ、クラスカルウォリスの検定により両群の介入前半($p=.045$)と後半($p=.027$)に有意差が確認された。LF/HF、HF、皮膚温、呼吸数には有意差は見られなかった。なお実施中の気分不良なども見られなかった。POMSに関しては両群ともに介入前後で「緊張-不安」「怒り-敵意」「疲労」の有意な低下が見られ、実験群のみ前後で「活気」の有意な低下が見られた。しかし両群に交互作用は見られず、マッサージによる効果を特定することはできなかった。タッチ尺度に関しては実験群が対照群に比べてタッチを好ましく感じていることが明らかになった。

(5) 癒しの看護技術としてのハンドマッサージのがん患者への効果に関する研究

がん患者5例に対してハンドマッサージを実施したところ、リラクセスの指標である心拍数の減少が全事例で認められ、HFの上昇が4事例で認められた。交感神経活動の低下を示す指尖部の皮膚温度および皮膚血流量の上昇もそれぞれ4事例、3事例で認められた。しかしLF/HFの上昇も3事例で認められた。心理的反応の分析やインタビューデータからは、ハンドマッサージの気分改善やリラクセスを示唆する反応が得られたが、その反応には個人差があり、ハンドマッサージの時間が短い、力が弱い、両手にもやってほしいなど物足りないという感想もあった。実施中の気分不良は見られなかった。

(6) 癒しの看護技術に関する普及プログラムの評価研究

当日会場は開始前から満席であり、看護職の関心の高さが感じられた。ハンドマッサージの手技に関して「優しさや温かさを交流しあえた」「大切にされていると感じることができた」「もっと勉強したい」「臨床や教育で活用してみたい」などの意見が得られるとともに、臨床での適用やそれを支える体制づくりなどの課題も明らかにされた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 川原由佳里・守田美奈子・田中孝美・本江朝美・田中晶子・奥田清子・五味己寿枝、触れるケアをめぐる看護師の経験：身体論的観点からの分析と考察、日本看護技術学会誌, 8(2), 2009. 査読有
- ② 川原由佳里・安達裕子・樋口佳栄・佐々木笑・斉藤梓・守田美奈子・本江朝美・田中

晶子、五味己寿枝、日本看護技術学会第6回学術集会報告、交流セッションX癒しの看護技術：触れることの意味、日本看護技術学会誌、7(1)56-58, 2008. 査読無

[学会発表] (計6件)

- ① 田中晶子、川原由佳里、守田美奈子、安達祐子、本江朝美、奥田清子、樋口佳栄、斉藤梓、五味己寿枝、癒しのプロセスを促進する看護技術の開発研究(その2) ハンドマッサージの効果ー心理・社会的側面の評価、第28回日本看護科学学会学術集会(福岡)、平成20年12月13日。
- ② 安達祐子、川原由佳里、守田美奈子、田中晶子、本江朝美、奥田清子、樋口佳栄、斉藤梓、五味己寿枝、癒しのプロセスを促進する看護技術の開発研究(その1) ハンドマッサージの効果ー生理機能の評価、第28回日本看護科学学会学術集会(福岡)、平成20年12月13日。
- ③ 奥田清子・川原由佳里・守田美奈子、安達祐子・本江朝美、田中晶子、田中孝美・佐々木笑・五味己寿枝、吉田みつ子、オイルを用いたハンドマッサージの効果、第10回日本代替・相補・伝統医療連合会議(JACT)第6回日本統合医療学会(JIM)(名古屋)、平成18年12月10日。
- ④ 安達祐子・川原由佳里・守田美奈子・奥田清子・吉田みつ子・田中孝美・佐々木笑、五味己寿枝、田中晶子、本江朝美、「癒し」の看護技術の実践状況と今後の課題、第10回日本代替・相補・伝統医療連合会議(JACT)第6回日本統合医療学会(JIM)(名古屋)、平成18年12月9日。
- ⑤ 川原由佳里・安達祐子・守田美奈子・吉田みつ子・田中孝美・奥田清子・本江朝美、田中晶子、五味己寿枝、看護における癒しの技としてのタッチに関する記述的研究、第26回日本看護科学学会学術集会(神戸)、平成18年12月3日
- ⑥ 川原由佳里・安達祐子・吉田みつ子・奥田清子・田中孝美・守田美奈子、「癒し」の技ーアロマセラピストたちのナラティブから、第9回日本代替・相補・伝統医療会議、第5回日本統合医療学会合同大会(京都)、平成17年12月10日。

[図書] (計1件)

- ① 川原由佳里・守田美奈子監修、安達裕子、本江朝美、田中晶子、奥田清子他訳他3名、ホリスティック・ナーシング (Dossey, B. M., Keegan, L., & Guzzetta, C.E. 編: Holistic Nursing, Healing and Holistic

Approach) エルゼビア・ジャパン 2006年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川原 由佳里(KAWAHARA YUKARI)
日本赤十字看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：70308287

(2) 研究分担者

守田 美奈子(MORITA MINAKO)
日本赤十字看護大学・看護学部・教授
研究者番号：50288065
安達 裕子(ADACHI YUKO)
日本赤十字看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：70248970
本江 朝美(HONGO ASAMI)
上武大学・看護学部・教授
研究者番号：80300060
田中 晶子(TANAKA AKIKO)
昭和大学・保健医療学部看護学科・講師
研究者番号：90424275
吉田 みつ子(YOSHIDA MITSUKO)
日本赤十字看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：80308288
田中 孝美(TANAKA TAKAMI)
日本赤十字看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：60336716
奥田 清子(OKUDA KIYOKO)
日本赤十字看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：10386790
樋口 佳栄(HIGUCHI YOSHIE)
日本赤十字看護大学・看護学部・助手
研究者番号：00460098

(3) 連携研究者(最終年度のみ)

本江 朝美(HONGO ASAMI)
上武大学・看護学部・教授
研究者番号：80300060
田中 晶子(TANAKA AKIKO)
昭和大学・保健医療学部看護学科・講師
研究者番号：90424275